

＝ 家族のため、仲間のため、熱い思いをもって ＝

加盟組合の機関紙を送っていただいている。全てを熟読することは難しいが時間は有効に活用することが大事。幸いにも始発駅からの通勤のため、満員電車の朝も座席に座ることができ、少し遠慮して身を小さくしながら読ませてもらっている。

先般、三菱重工グループ労連の「ひしろうほう&ゆないと」が届いた。第1回安全衛生強化月間特集号、安全作文・安全ポスターの紹介である。その中には最優秀賞、優秀賞、佳作に選ばれた作品が掲載されていた。作文の中には、どれも視点を変え「あんぜん」の持つ意味合い、大切さについて綴られ胸に響く作品の多さに感銘したところである。

ものづくりの職場は常に危険と背中合わせにある。物を運び、機械を動かし、粉塵飛び交い、時に高温、多湿の現場、外気に晒され身も凍える場所での仕事もある。

そうした職場第一線を知らない著者が「現場は非日常空間」と題して、はじめて工場最前線の見学をし、まず感じたことは危険がいっぱい…、一瞬の気の緩みも許されない…。最優秀賞の天満さんの作品である。昔語った覚えがあるが「なれ」には、良いなれと悪いなれがある。諸説あろうが、馴れあいの「馴れ」は悪いなれ、習慣の「慣れ」は良いなれ。ご安全にの挨拶、指差呼称も相互注意も自然と慣れ(習慣)で行動できなければならない。はじめて見る第一線の現場は慣れない人にとっては大いに肝を冷やしたことだろうが、その思いを私たちは再度胸に焼き付けておかなければならない。墜落・転落、挟まれ・巻き込まれの類似災害は、馴れで怖さを忘れてしまっているからかもしれない、ということであらためて気付かされるものだった。

また、横断歩道を渡る時「右見て、左見て」と、お父さんとして子供たちに教える姿を題材に、自分自身に置き換えて、あたり前をあたり前に行なえているか、「指差呼称」は大丈夫かと自問自答するもの。子供たちは今日もちゃんと「右見て、左見て」をやっていたと結ぶ。かわいい我が子のための「あんぜん」が行間の端々にきざまれた作品もあった。

今一つは、悔しく、悲しいできごとを教訓に。家族の大切さを語り、一家の大黒柱としての自覚を持つ意味合いを伝えてくれた先輩が、ある日突然、高電圧による火傷事故で命を失うという痛ましいできごと。「あんぜん」は、ご家族はもとより、同僚、知友人、その人に関わる全ての人に心の痛みを残していく。この痛みは、消えるどころか年を重ねるごとに大きくなっていく…。私自身が常に皆さんに話すことそのものである。

働く場所は、自らの幸せづくりの場。そこで命を落とすことがあってはならない。労働運動はそうした働く仲間の思いを少しでもサポートし、形にしていく役割と責任がある。人それぞれに、表現は違うが、大切な何かを思い起こさせてくれる作品ばかりであった。

「安全と健康が全ての基軸」、土台をしっかりと固めたうえで、いよいよ山場に迫ったAP18春季取り組みを最後のひと踏ん張りで乗り越えていかなければならない。

こんなにも家族を愛し、同僚を愛し、働く職場の明日を創る仲間がいる。ものづくりに働く労使の誇りにかけて、しっかりとした結果を示していかなければならない。ご安全に。

2018年3月7日  
日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一